

バードリサーチ ニュース

2012年1月号 Vol.9 No.1

活動報告

照度ロガーで開葉時期を探る

植田睦之

ヨーロッパでは、温暖化で虫の発生する時期が変化し、その変化についていけないマダラヒタキの個体数が減少していることが知られています。日本の鳥でもそのような鳥はいるのでしょうか？

バードリサーチでは、鳥の繁殖時期の温暖化による影響を明らかにしようと、ICレコーダーや巣箱と温度ロガーを使った調査を実施しています。しかしこの方法で鳥の繁殖時期の変化はモニタリングできるのですが、食物の発生時期のモニタリングはできないので、上記したようなことは明らかにすることはできません。繁殖期の鳥の主要な食物であるイモムシ類は、樹木の開葉とともに個体数が増えます。樹木の開葉時期を知ることができれば、鳥の食物の発生時期を推定でき、鳥の繁殖時期と比較することでそれを明らかにすることができそうです。

まずは落葉時期がわかるか？

東大の石田健さんに照度ロガー(HOBOペンダントロガー CO-UA-002-64)を紹介いただいたので、地球環境基金の助成金を使って、まずは落葉時期を把握できるかを実験してみました。樹木の下に設置したロガーの照度の変化と落葉時期との関係について見てみようというものです。

10月、自宅の庭、近所の2か所の雑木林、八王子の丘陵帯にロガーを設置し、いつ頃落葉がはじまったのかを記録し、すべての調査地の落葉が終わった年末にロガーを回収してデータを見てみました。残念なことに1か所の雑木林ではロガーが盗難にあって、なくなってしまいましたが、それ以外の場所からはデータを得ることができました。その結果が図です。

谷よりも尾根のほうが把握が難しい？

左上の自宅の庭の柿の木は、11月に入って、落葉がはじまったのですが、それからしばらくして照度が高くなりました。雑木林や丘陵では、12月に入って落葉がはじまりましたが、やはりそれからしばらくしてから照度が上昇し、いずれも落葉の時期を捉えることができていました。意外だったのは丘陵の尾根と谷の違いです。設置当初は、「谷は暗いから、落葉の把握は難しいかな」と思っていたのですが、尾根の方が落葉前と後との差が少なく、把握が難しい状況でした。尾根は日当たりが良いので、葉があるときでも葉の隙間から陽が差し込んだりして、葉のないときとの差が小さく、落葉の把握が難しいのかもしれませんが、そうした地形の違いではなく、陽が差し込む場所かどうかといった設置場所による違いなのかもしれません。

落葉時期が把握できたのだから、開葉時期の把握もいけそうな気がしますが、設置場所のノウハウの蓄積も含め、春にも再度実験してみたいと思います。

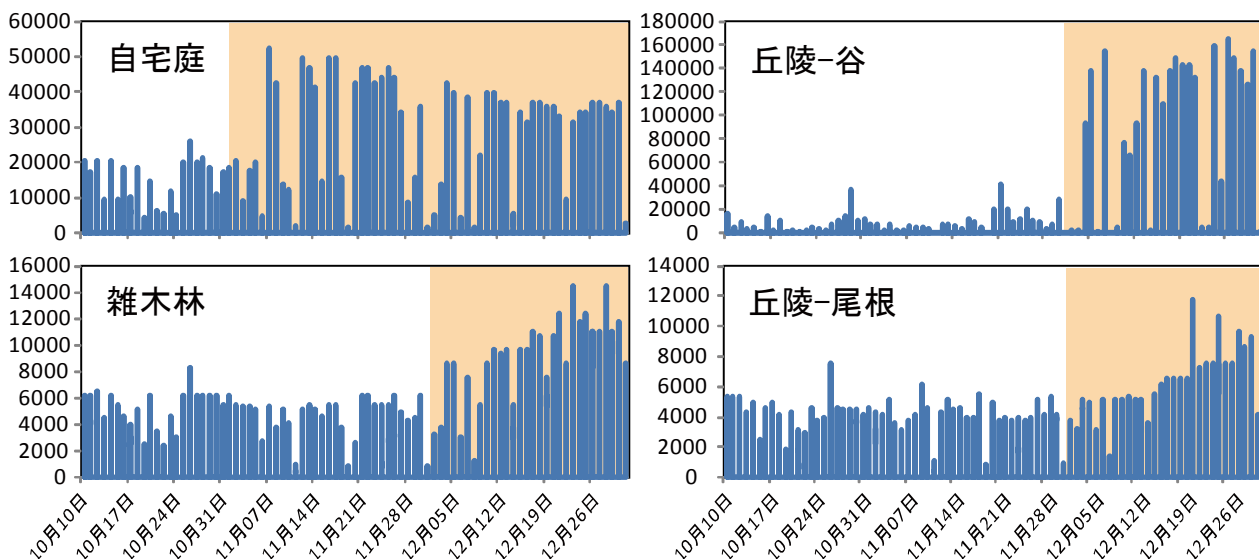


図. 相対照度(Lux)の季節変化. オレンジ色の部分が落葉開始以降の時期を示す。

活動報告

バードリサーチ調査研究支援プロジェクト ～寄付＆投票のお願い～

高木憲太郎

この支援プロジェクトは、鳥の調査や研究に対して、金銭的な支援を行なうものですが、大きなひとつの財源をもとに支援するほかの助成金とは違います。みなさんから少しずつの寄付を募り、それをもとに支援を行ないます(図)。

そこで、支援して下さるみなさんと、鳥類の調査や研究をしているひとをつなぐ工夫をしています。寄付していただく際は、応援したい支援先を選ぶことができます。支援していただいた方には、調査研究の成果報告が届きます。鳥類の調査・研究をみんなで支え合いながら、発展させていける仕組みになればと思っています。ご協力、よろしくお願いたします。

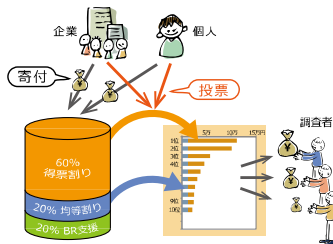


図. 集まった寄付のうち、2割を支援先に均等に分配し、6割を得票数に応じて支援先に分配します。残りの2割は、バードリサーチの活動全体へのご支援とさせていただきます。

1. 選ぶ

バードリサーチが募集し、一次選考によって選んだ最大9件+バードリサーチからの1件の調査・研究プランの中から、応援したいプランを選んでください。

2. 寄付

個人 3,000 円
企業 10,000 円

* 何口でも OK です。

3. 投票

1口の寄付に対して1票をお預けします。寄付が複数口の場合、ひとつのプランに何票投票しても構いませんし、複数のプランに投票することもできます。投票先を指定しない寄付も大歓迎です。

寄付＆投票の方法は次の2通りです

● クレジットカードで寄付を送る場合

下記のホームページをご覧ください。

■ 調査研究支援プロジェクト 寄付募集ページ
http://www.bird-research.jp/1_event/aid/kifu.html

● 銀行または郵便局から寄付を送る場合

Step1. メールする。

次の情報を高木 (takagi@bird-research.jp)宛てにメールでお伝えください。

- ・お名前とご住所
- ・寄付口数
- ・支援する調査・研究プランと投票数
- ・あなたのお名前を支援先に伝えて良いかどうか

Step2. お金を振り込む。

下記のいずれかの口座に合計額を振り込んでください。(振り込み手数料はご負担ください。)

ジャパンネット銀行 (銀行番号0033)

本店営業部(支店番号001) 普通 8148578

名義: トクヒバードリサーチ

郵便振替口座

記号番号: 00150-9-685654

名義: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

郵便貯金(ぱるる口座)

記号番号: 10120-49233551

名義: 特定非営利活動法人 バードリサーチ



支援先の調査・研究プランの紹介

支援先となる調査・研究プランの募集は2011年10月15日～12月15日の期間に行ない、21件のプランが集まりました。その中から支援先を決定するため、昨年末に立教大の上田恵介教授、山階鳥類研究所の尾崎清明副所長、日本野鳥の会の金井裕主席研究員、東京大学の樋口広芳教授、バードリサーチの植田睦之代表の5名で一次審査を行ない、10件の支援先を選定しましたので、各プランの概要をご紹介します。詳しい内容は、下記のURLからPDFをダウンロードしてご覧ください。

http://www.bird-research.jp/1_event/aid/BR-aid2011001-010s.pdf

001 内陸のイソヒヨドリ営巣調査

八王子・日野カワセミ会

イソヒヨドリは、日本では沿岸部に生息するツグミの仲間です。ですが、近年内陸部で観察されることが多くなり、繁殖も確認されるようになりました。この調査・研究プランでは、東京都の八王子市と日野市で繁殖するイソヒ

ヨドリの数を調べ、営巣環境や給餌内容などを調べてみようという計画しています。こうした生態が明らかになることによって、なぜ、いま内陸にイソヒヨドリが増えてきているのか、その糸口がつかめるのではないかと思います。

002 富士山北麓のソウシチョウの分布状況

西 教生

ソウシチョウは、中国南部などに生息している外来種で、下層群落が発達した広葉樹林に生息しています。ところが、西さんはこの夏、北麓側の針葉樹林でソウシチョウの巣立ちヒナを観察しました。今のところ、ソウシチョウの影響が確認されているのはウグイスのみですが、植林や針葉樹林でソウシチョウが繁殖するようになると、生息域は広がり、在来鳥類への影響も広がるかもしれません。この調査・研究プランでは、富士山北麓においてソウシチョウの分布を周年にわたって



活動報告

調査します。針葉樹林への進出はあるのか？を探るとともに、情報の少ない亜高山帯の鳥類相の季節変化の情報も得られると思います。

003 武蔵野台地に生息するカッコウ分布調査企画

板谷浩男、松本昇也、益子理、木本祥太ほか

カッコウは、日本では高緯度地域や高標高地に生息して、托卵して繁殖することで有名な鳥ですが、関東の低標高地である武蔵野台地でも生息が確認されています。本来の生息環境よりも温暖な武蔵野に、なぜ、カッコウが分布しているのか？その謎に迫ろう、というのがこの調査・研究プランの趣旨です。板谷さんたちは、武蔵野地域においてカッコウとその托卵相手となる鳥の生息状況をラインセンサスによって調査しようと計画しています。

004 セグロカモメの繁殖地を探せ！

NPO法人徳野鳥観察舎友の会 佐藤達夫

セグロカモメは日本各地でふつうに見られる冬鳥ですが、その生態は実はあまりわかっていません。繁殖地がどこなのか、どのようなルートで渡ってきて、越冬期間中はどんな生活をしているのか？この調査・研究プランでは、2007年から続けてきた足環標識調査に加えて、ジオロケータという日長を捉えて位置を割り出す機器を使ってセグロカモメの移動と渡りを調べようと計画しています。

005 オガサワラノスリを数え続ける

一極少個体群の草の根モニタリングー 千葉夕佳・千葉勇人

オガサワラノスリは、外来種のネズミヤトカゲといった餌動物に支えられて70つがい弱が小笠原諸島に生息しています。千葉さんたちは、世界自然遺産に登録されたことによる観光客の増加や、外来種を駆除して在来種を保全する自然再生事業が、オガサワラノスリの存続に悪影響を与えていると心配しています。この調査・研究プランでは、ネズミ類が根絶されて巣立ちヒナが確認されなくなった兄島などでの生息状況の調査とともに、観光と自然再生事業がオガサワラノスリに与える影響を調べる計画です。

■ビデオレターが届いています。ご覧ください。

http://www.bird-research.jp/1_event/aid/

006 三番瀬周辺全体でカモは何羽？

—インターバル画像モニタリング手法の開発—

浦安自然まるごと探検隊：松岡好美、山北剛久勇人

干潟や広い開水面に渡来する渡り性水鳥類の個体数は、しばしば大きく変動します。たまたま調査日に大きな群れが隣の環境に移動していた、調査日が渡りのピークとずれてしまった、ということが起こるのです。この問題を取り除くには、頻りに多数地点で調査する必要がありますが、現実的ではありません。そこで松岡さんたちは一定間隔で撮影できるインターバルカメラを用いて、半自動的に調査してはどうか、と考えました。この調査・研究プランでは、東京

湾の三番瀬とその周辺にいるカモ類を対象として、インターバルカメラによるモニタリング方法の開発を行ないます。潮の満ち干きに対して鳥たちがどう行動しているのか、などもわかってくるのではないのでしょうか。

007 鳥はなぜ尾を振る？—モズが尾を振る理由を探る—

遠藤幸子

モズは皆さんもご存じのように、よく尾を振る鳥のひとつです。でも、エネルギーを消費してまで、何のために振っているのでしょうか？遠藤さんは日々の観察の中で、捕食者がいるときといないときで、どうも尾の振り方が違うのではないかと、ということに気がつきました。そこで、この調査・研究プランでは、実験的にモズやそのヒナを捕食する動物の剥製をモズに見せて、尾の振り方(回すor 縦振り)や振る頻度が、見せていないときと変化するかどうかなど、ビデオカメラを使って調べようと企画しています。



008 日本国内におけるアリスイの繁殖生態

加藤貴大

アリスイは、配偶システムや卵の数など基本的な生態さえ、まだわかっていません。加藤さんは、2011年の春に、八郎潟で30巣を確認しており、これに巣箱を加えて調査しようと企画しています。一夫一妻で繁殖しているのかどうか、卵の数や抱卵・育雛期間、巣立ち率、給餌頻度など基礎生態の解明は、全ての調査や研究のベースとなる重要なものです。アリスイならではの面白い研究につながっていくのではないかと思います。

009 日本国内のブッポウソウの生息数調査

水野聖子 岡山大学大学院生

ブッポウソウは、レッドリストに名を連ねている鳥で、地域ごとに巣箱による保護がすすめられています。しかし、全国的な生息状況は、まだ、まとめられていません。この調査・研究プランでは、全国から情報を収集し、日本全体の生息状況の把握を目指していますが、各地でブッポウソウの保護活動を行なっている方たちとの情報の交換をうたっており、人と人をつなぐネットワークがこの鳥の保護につながっていくと思います。



010 「なつみずたんぼ」における水鳥の利用状況

バードリサーチ・オリザネット・東大院 農 生物多様性科学研究室

なつみずたんぼというのは、もともと水田だった場所を麦畑にしたところのお話です。麦を育てない夏の間水をはっておくことで、その場所がサギや淡水性のシギやチドリ採食場所になる、というものです。バードリサーチでは、オリザネットと、東大の生物多様性科学研究室と連携して調査を行ないます。どんな条件であれば鳥が集まるのか、鳥たちはそこで何を食べているのか、農作業との水鳥保全の融合について探っていきたいと思っています。

アカヒゲ 英:Ryukyu Robin 学:Erithacus komadori

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ヒタキ科

自然翼長: ♂75.5±1.6 mm ♀72.5±1.6mm
 尾長: ♂48.0±2.3 mm ♀45.6±1.9 mm
 ふ蹠長: ♂28.3±0.7 mm ♀27.9±0.7 mm
 鼻孔前嘴峰長: ♂9.6±0.5 mm ♀9.6±0.5 mm
 全頭長: ♂37.9±0.9 mm ♀37.5±0.8 mm
 体重: ♂23.0±1.3g ♀24.4±2.4g

※トカラ列島中之島での計測値(♂N=433, ♀N=364; 経年再捕個体の重複計測値含む)。

羽色:

亜種により違いがあるが、亜種アカヒゲ *E. k. komadori* ではオスの頭頂から背面が橙色で下面は白色だが、額から喉、胸にかけてと脇の部分が黒い(写真1)。メスでは黒色部がなく、全体に褐色味が強い。亜種ホントウアカヒゲ *E. k. namiyei* では、雌雄とも背面の褐色味が強く、下面は灰白色で、オスの脇に黒色部分がない。



写真1. 亜種アカヒゲのオス。

鳴き声:

「ヒー、ヒョリヒョリヒョリ」「ヒイン、ヒョヒョヒョ」「ウヒー、ウヒウヒウヒウ」などとさえずる。長音の後にリズムカルな繰り返し部分が入るさえずりの構成は共通しているが、個体差だけでなく、同じ個体でもさえずりごとに微妙な変化を加えることが多い。亜種間でさえずりに変異があり、亜種アカヒゲの方が繰り返し部分の1シラブルが短い場合が多く、せわしく単調に聞こえる。メスもさえずる。他の動物が巣に近づいたときなどには「ヒュー」という警戒声を発する。地鳴きは低い声で「ギューッ」などと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

亜種アカヒゲは男女群島、トカラ列島、奄美群島で繁殖するが、大隅諸島でも夏期の観察事例が少数ある。トカラ列島以北の繁殖集団は基本的に夏鳥で宮古島以南の先島諸島で越冬し、奄美群島の繁殖集団にも一部は渡りをする個体が含まれる。亜種ホントウアカヒゲは沖縄島北部に留鳥として生息する。非繁殖期には九州本土、朝鮮半島、台湾でも記録がある(亜種不明)。

生息環境:

下層植生の発達した照葉樹林に生息するが、トカラ列島ではリュウキュウチク林の一部にも生息する。海岸性照葉樹林から標高800m付近の灌木林まで繁殖期のさえずりが聞かれる。照葉樹壮齢林に多いが、二次林や社寺林、屋敷林でも少なくない。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 非繁殖期 繁殖期 渡り

基本的には一夫一妻制だが、2つの巣に平行して給餌しているオスが確認された事例がある。0.2~0.3ha程度のなわばりを形成し、雌

雄ともになわばり防衛行動をとる。トカラ列島では一繁殖期に3回(沖縄島では4回)まで繁殖に成功することがあるが、通常、つがい関係はその間継続する。翌年まで雌雄ともに生残した場合にもつがい関係が継続するケースが多い(15/19例)。造巣と抱卵はメスのみが行う。巣内雛への給餌は雌雄で行い、巣立ち後も給餌を継続する。2回目以降の繁殖を行う場合、ヒナが巣立った直後からメスは造巣をはじめ、メスが抱卵を開始して以降の巣立ち雛の世話は主にオスが行う。

巣:

広葉樹、リュウキュウチクやマツ類の枯葉、枯れたツル、ピロウの樹皮などを用いた椀状の巣を、リュウキュウチクの枝元、ピロウの葉の上、広葉樹の枝先、樹洞や幹の割れ目、ヘゴの枯れた幹、岩棚など多様な場所にかける。巣箱をはじめとする人工構造物も良く利用する。葉脈だけになった枯れ葉や細いツルなどを敷いて産座にする。



写真2. リュウキュウチクに作られた巣と卵。

卵:

一腹卵数は1~5卵で平均3.3±0.6卵(N=202)、卵の重さは平均3.3±0.3g(N=428)。白またはごく薄い褐色地に暗褐色の斑点がまばらにあり、斑点は鈍端に多い。

抱卵・育雛期間・巣立ち率:

抱卵期間は11~15日で平均12.8±0.8日(N=118; 終卵日を抱卵開始日と仮定)、捕食されなかった場合の孵化率は平均で90.2%(N=529卵)、一腹雛数は平均3.0±0.8羽(N=158)であった。育雛期間は12~17日と変異が大きい平均14.2±1.3日(N=63)であった。トカラ列島に架設した巣箱では、巣立ちに成功した巣の割合は29%で、イタチによると推測される捕食で卵またはヒナが消失した巣が65%、巣の破損が認められて卵が放棄されたものが6%であった。巣箱営巣以外の通常の営巣でも、巣立ちの成功率は同程度であった。捕食以外の要因でヒナが死亡したり、巣が破損することは多くない。



写真3. 巣内のヒナ。

渡り:

トカラ列島の繁殖集団は基本的に夏鳥で、3月下旬から4月上旬に渡来し、9月から10月に大半の個体が渡去、先島諸島などで越冬する。繁殖地への成鳥の帰還率は年変動があるが、捕獲率を考慮した生残率はオス61%(N=96)、メス47%(N=67)と推定された。巣立ち雛の出生地への帰還率は6.8%(N=192)であった。奄美大島・徳之島集団の多くと、沖縄島集団の個体は留鳥である。

*生活史のデータは主にトカラ列島中之島での観察による。奄美群島・沖縄島の留鳥個体では2月末から繁殖を開始することもある。

4. 食性と採食行動

ヒナへの給餌内容は、チョウ目、ハエ目、カメムシ目、バッタ目、ゴキブリ目、シミ目などの成虫および

幼虫、クモ類、ムカデ類、ミミズ類などの地表や土壌表層の無脊椎動物によって構成される。地上でつばみや掘り返し行動が観察されることが多いが、餌内容からすると樹上での採食頻度も低くないと推測される。捕獲した成鳥の口角に果汁が付着していることがあり、果実も採食すると考えられる。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● ノビタキ亜科 Saxicolinae の系統関係

アカヒゲとコマドリは形質や生態に共通点が多く、両種は姉妹種とされる。そのコマドリの羽色がヨーロッパコマドリとよく似ているため、多くの文献ではこれら3種を *Erithacus* 属に分類する説が採用されてきた。しかし、ヨーロッパコマドリとでは分布が不連続で、形質や生態には相違点も多いため、東アジアの2種は *Luscinia* 属と近縁だとの説をとる文献も少なくなかった。最近のDNAの分析では、アカヒゲはシマゴマやコルリなど東アジアの *Luscinia* 属の一群と近縁で、ヨーロッパコマドリとは古い時代に分化したことが確かめられ、後者の説を支持する結果が得られている。その一方で、*Luscinia* 属もまた単系統ではないことが明らかになっており、将来、アカヒゲを含む東アジアの種群には新しい属名が提案されるかもしれない。

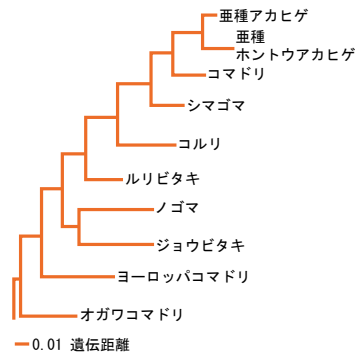
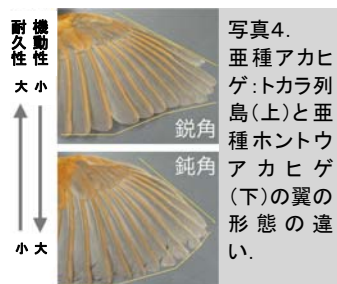


図. ミトコンドリアDNAのチトクロームb領域の塩基配列から推定した最尤系統樹。

● 島嶼群ごとの生活史変異と集団の分化

アカヒゲの形態と生態には島嶼群ごとに変異がある。亜種間で形態の変異があるだけでなく、亜種アカヒゲの中でも繁殖や渡りなどの行動に島嶼群間での変異が大きい。このような変異は遺伝的な背景と対応しているのだろうか？ミトコンドリアDNAの塩基配列でみると、2つの亜種はそれぞれ大きく異なる系統群に属し、その分岐年代は数十万年より古い。さらに、北に分布する亜種アカヒゲの中では徳之島・奄美大島・トカラ列島の3つのグループが認められ、グループ間で遺伝的交流がほとんどないと推測される。ここで、渡りの行動と密接に関係し、遺伝性が高い形質「翼の尖り方」を集団間で比較してみると、渡りをしない沖縄島の集団が丸い翼、渡りをするトカラ列島集団がとがった翼をしている。ところが、渡りをしない個体の多い奄美大島・徳之島集団の翼は、トカラ列島集団よりは丸いものの、沖縄島集団に比べるとかなり尖っていた。アカヒゲは、まず、渡りの亜種(アカヒゲ)と留鳥の亜種(ホ



ントウアカヒゲ)として古い時代に分化し、その後、最近になって渡りの亜種(アカヒゲ)の中に留鳥化する集団(徳之島・奄美大島)が生じたことで亜種内にさらなる集団の分化が始まったと推測される。

● アカヒゲの渡り

先島諸島には相当数のアカヒゲが越冬しており、西表島の原生的な森林から、黒島の様に農地化が進んだ島の小さな御獄林まで、多様な森林で越冬している。これまで先島諸島における観察事例が多くなかったのは、越冬地では開けた場所に出てくるのが稀で、さえずることも少ないためと思われる。先島諸島で捕獲した個体のミトコンドリアDNAの遺伝子型から繁殖地を推定すると、越冬個体の87%はトカラ列島由来の個体、奄美大島由来の個体が8%、徳之島由来の個体が5%であった(N=37)。それまで留鳥だと考えられていた徳之島・奄美大島集団も、一部が先島諸島まで渡りをしている部分的な渡りの集団であることがわかったが、どのような個体が渡りをし、あるいは繁殖地に留まるのかはまだわかっていない。ちなみに、先島諸島における繁殖期のアカヒゲの記録はこれまで1例もなく、亜種ウスアカヒゲとして記載されたことのある先島諸島の繁殖集団が実在する可能性は極めて低い。

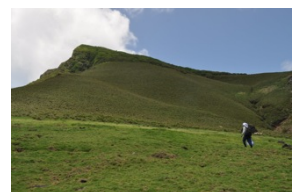
6. 引用・参考文献

Kawaji, N. and Higuchi, H. 1989. Distribution and status of the Ryukyu Robin *Erithacus komadori*. J. Yamashina Inst. Ornithol. 21:224-233.
 Sangster G, Alström P, Forsmark E, Olsson U. 2010. Multi-locus phylogenetic analysis of Old World chats and flycatchers reveals extensive paraphyly at family, subfamily and genus level (Aves: Muscicapidae). Mol. Phylogenet. Evol. 57: 380-92.
 Seki S-I. 2006. The origin of the East Asian *Erithacus* robin, *Erithacus komadori*, inferred from cytochrome b sequence data. Mol. Phylogenet. Evol. 39: 899-905.
 関伸一 2002. アカヒゲの生存率と移動・分散距離. 九州森林研究 55:171-172.
 関伸一 2009. 男女群島におけるアカヒゲ *Erithacus komadori* の生息状況と集団の分子系統的位置. 日本鳥学会誌. 58: 18-27.
 関伸一 2010. 繁殖分布の周辺域におけるアカヒゲの生息状況(II):屋久島および種子島における繁殖期の生息状況. 九州森林研究 63:95-96.
 Seki S-I & Ogura T. 2007. Breeding origins of migrating Ryukyu Robins *Erithacus komadori* inferred from mitochondrial control region sequences. Ornithol. Sci. 6: 21-27.
 Seki S-I, Sakanashi M, Noritomo N, Kotaka N. 2007. Phylogeography of the Ryukyu Robin (*Erithacus komadori*) population subdivision in land-bridge islands in relation to the shift in migratory habit. Mol. Ecol. 16: 101-113.
 関伸一・所崎聡・溝口文男・高木慎介・仲村昇・ファーガス・クリスタル 2011. トカラ列島の鳥類相. 森林総合研究所研究報告 10: 183-229.

執筆者

関伸一 独立行政法人 森林総合研究所

アカヒゲの研究に関わり始めて16年にもなります。それで、執筆依頼をいただいたのですが、なかなか書き上げられずにいた理由の一つは「知れば知るほどわからない」からです。この生態図鑑の記述を頭から信用したりしないでください、それは私が観察したごく僅かなできごとの報告でしかないのですから。アカヒゲをめぐる探索の日々は今も続いています。



トカラ列島・上ノ根島にて

活動報告

「さえずりナビ」がリリースされました

植田陸之

2011年8月号のニューズレターで、電気通信大学の笠井研究室と共同で開発中とお知らせした「さえずりナビ」。1月25日に公開されました。iPhone, iPad, iPodTouchユーザーの方、無料でダウンロードして使うことができますので、ぜひお試しください(インターネットへの接続が必要です)。このアプリは、鳥を見た場所、季節、環境、声の特性などを指定することで、該当する鳥を出現率が高い順にリストアップしてくれます。そして、その声を聞くことができます。



写真: さえずりナビの起動画面。バードリサーチマークをデザインいただいた重原さんにつくっていただきました。

毎年、全国各地で森林の鳥のモニタリングの調査研修会をやっているのですが、調査方法は伝えることができても、調査を行なう前提条件でもある鳥の識別については、短期の研修会では何ともできないのが悩みでした。こうした識別力の向上は、識別力のある人と一緒に調査するのが一番ですが、調査員の育成が特に必要な、調査をできる

人があまりいない地域では、一緒に調査をする機会も少ないというところがジレンマでした。自習するにしても、目視による識別は良い凶鑑がありますが、鳴き声の識別のためにはそうしたツールがほとんどありません。その一助にならないかと「さえずりナビ」を開発しました。こうした、自習ツールとしてだけでなく、どこかに鳥を見に行く時にいそうな鳥を予習したりといった使い方もできると思いますし、いろいろ楽しめるのではないかと思います。

使ってみると、検索結果に目的の鳥が出てこなかったり、まだまだ不備もあると思います。そうしたことを見つけたら、ご報告いただき、データベースを改良し、みんなで「さえずりナビ」を育てていけたらと思っています。ぜひ、ご協力お願いします。また、観察した鳥を報告するような機能や、「シジュウカラとヒガラの中間のような声」みたいな検索の仕方をできるようにするなど、機能の充実にも務めていけたらと思っています。「こんなことできたらうれしい」のようなアイデアもお待ちしています。

このアプリの開発にあたっては、音源や写真の提供、データベースのチェック等に多くの皆様からご協力をいただきました。環境省生物多様性センターからは自然環境保全基礎調査の鳥類分布調査のデータを提供いただき、iGreenとFMBIRDにはナレーションや使用方法解説の制作にご協力いただきました。ご協力いただいた皆さんに感謝いたします。

■さえずりナビのページ

<http://www.bird-research.jp/1/saenavi/>

研究誌 Bird Research よい

● 今月の新着論文

雲野 明. 2012.
プレイバック法をもちいたクマガラの生息調査.
Bird Research 8: A1-A10

行動圏の広い鳥の生息状況を調べるのは大変です。調査をしてその鳥が記録できなくても、そこに生息していないのか、それとも行動圏内の違う場所に行っているだけなのか、それとも潜んでいるのかわかりません。そんな時に使われるのがプレイバック法です。鳴き声を流して、反応

する鳥を記録します。藪などに潜んでいても、鳴き返すなど反応があれば、その存在を知ることができますし、遠くにとおる大きな音でプレイバックすれば、調査できる範囲は格段に広がり、調査効率があがります。この方法を使って行動圏の広いクマガラの調査を行なったのがこの論文です。まだプレイバックがどれほど有効なのかは今回の結果からは断言できないものの、プレイバックを使った調査では、時間帯や季節を問わずデータがとれているので、単なる目視調査と比べると、効率的に調査できそうです。こうした情報が蓄積されていくことで、クマガラの効率的な調査とそれに基づく保護活動が進むことを期待したいです。

【植田陸之】

バードリサーチニュース 2012年1月号 Vol.9 No.1

2012年1月27日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田陸之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: ヒドリガモ